

第7回

湯崎知事と
「ひろしまの未来を語る」
(廿日市市)

と き 令和3年4月19日(月)

ところ 山崎本社 みんなのあいプラザ 多目的ホール

目次頁

開会	2
知事ビジョン説明	2
参加者①	
参加者②	
参加者③	
参加者④	
参加者⑤	
市長コメント	
フリートーク	
閉会	

広島県

開 会

司 会： 皆様、お待たせしました。

ただいまから「安心▷誇り▷挑戦 ひろしまビジョン」意見交換会、「ひろしまの未来を語るin廿日市」を開催いたします。

はじめに、本日まで参加の皆さんをご紹介します。

湯崎知事の右手側から、市里尚弘さんです。光井祐子さんです。大島久典さんです。安村通芳さんです。早川幸江さんです。

また本日は廿日市市長、松本太郎様にも御出席いただいております。また、広島県議会議員、山下智之様にも御出席いただいております。

お忙しい中、誠にありがとうございます。

この会の模様は、ユーチューブでライブ配信を行っております。

通信回線の状況によっては、画像が乱れることもありますので御承知ください。

また、県のフェイスブックを通じて、ライブ配信を御覧の皆様からの御意見や御感想を募集しておりますので、フェイスブックを御利用の皆様は、ぜひ広島県の公式アカウントにコメントいただければと思います。

意見交換

司 会： それでは、本日のテーマであります「安心▷誇り▷挑戦 ひろしまビジョン」の説明、その後、意見交換に入りますが、ここからは湯崎知事に進行をお願いいたします。

湯 崎 知 事： それでは皆さん、こんばんは。

大変お忙しい中、また、お腹の空く時間に、こうやってお集まりいただきまして本当にありがとうございます。

廿日市、私も、このコロナの中で来る回数も減りまして、ちなみに私の生まれたまち、廿日市でございます。

そういう意味で非常にご縁が、その辺で生まれたんですけど、やはり管絃祭とか、管絃祭のない時にがらんとした地御前神社とか、私、地御前にいたもんですから思いだすんですけども、その後というか、地御前神社を設計したのが、地御前神社を造ったのが私の通産省のというか、大学1年生からの友人で通産省も一緒に行っていた同期の、おじいちゃんだということが分かりまして、すごい御縁を感じるなと思っているんですが、個人的なことは置いておいて、今日は「安心▷誇り▷挑戦 ひろしまビジョン」についてお話をするというか、コミュニケーションを図るということで設定をさせていただいております。

このビジョンですけど、10年後の目指す姿と、その実現に向けた方向性を示した、新たな県の総合計画なんですね。

これは新たな広島県づくり、皆さんと一緒に進めていきたいと考えているところでございまして、こういった意見交換の企画をつくらせていただいているところでございます。

皆様の率直な御意見をお伺いして意見交換をさせていただくことで、今後の施策の展開につなげてまいりたいと考えているところです。

最初に私からビジョンのポイントについて御説明をさせていただきます。

この画面を御覧いただければと思います。

まず策定に当たっての背景ですけども、いろいろなことがございまして、例えば人口減少とか少子高齢化、こういったことも、その10年前につくったビジョンは将来こうなるよということで書いていたわけですが、今や既にそれが現実化をしているというような状況がありますし、グローバル社会というのも、これもその前のビジョンで、その前の10年間のビジョンで大きな変化として指摘をしていたことですけども、これもますます大きく変わってきていると。

それからデジタル化、10年前のスマホと今のスマホと、えらい性能も違うんですが、それ以上に今、デジタルが社会を大きく変えようとしています。

それからコロナでも浮き彫りになってきた格差の問題、社会的にも大きな問題です。

それから、この間、我々、大規模な災害を経験しておりますし、さらに頻発しているということでもあります。

それからコロナがある。

こういったいろいろなことが起きておりまして、非常に先行きが不透明な状況にあるということがございます。

そういう中で今回のビジョンは、まず30年後に県としてどんな姿でありたいかということを考えまして、この30年後というのは非常に先の話ですから、具体的にはこうだというのはなかなかちょっと言いにくいんですが、若干、抽象的に30年後こうなっていたよねということを決めて、その30年後の姿にたどり着くために、10年後はどうなっているかなきゃいけないんだろうというの、これをつくりまして、10年後は少し今からでも見えるところがありますので、もうちょっと具体的ななかたちで目指す姿というのを決めて、その10年後の姿にたどり着くために、どんなことをやらなければいけないのかということをつくったのが、このビジョンとなっています。

それで、このビジョン全体の基本的な理念といたしましては、「広島に生まれ、育ち、住み、働いて良かった」と心から思える広島県を実現していこうということとございまして、この辺は前のビジョンと変わっていないってことなんですけど、さらに目指す姿として、県民の一人一人が「安心」の土台と、それから「誇り」によって、夢や希望に「挑戦」をしている、「仕事も暮らしも。里もまちも。それぞれの欲張りなライフスタイルの実現」という風にサブタイトルを打っています。

この欲張りなライフスタイルの実現というの、実はこの前のビジョンから引き継いでいるもの、今年の3月まで10年間のビジョンがあったんですが、それでも欲張りなライフスタイルの実現と言っていて、それはどういうことかということ、いわゆるワークライフバランスと呼ばれるものがありますけれども、世の中一般的に言われるのは、ワークライフバランスというのは日本の場合、特に、これまで仕事しすぎだったんじゃないですかと、ちょっと仕事の手をゆるめて暮らしを充実させていきましょと、例えば男性の育児だとか、そういうこともそうですし、介護の問題とか、そういったこともそうですし、一般的には100あったら、これまで60仕事で40暮らしだったのを、50・50にしましょとか、そういう風に言われると思うんですけど、広島県の場合は、60仕事で40暮らしだったら、60仕事で60暮らしで120にしましょという、そういう風に考えておりまして、だから欲張りという風に言っているんですね。

仕事を諦めるとか、あるいは暮らしを犠牲にするということではなくて、両方自分の、県民の皆さんの希望が叶う、そのために何が必要かということ是非常重要的なわけですけども、そういったライフスタイルが実現できるようにしよう。

「里もまちも。」というのは、これは、まちというのは分かりますね。

里というのは中山間地域とか過疎地とか言われる地域、あるいは廿日市のようなベッドタウン、あるいは中間にあって利便性の高いまち、そういったところもしっかりと発展させていこうということでもあります。

このビジョンのポイントとして3つ挙げていますけれども、今、申し上げた、「安心」の土台と「誇り」の高まりにより、夢や希望に県民の皆さんが「挑戦」をしているという、その県民の皆様の挑戦を後押ししていこうということ。

それから「適散・適集」社会のフロントランナーになる、これもまた後で御説明しますけれども、コロナによって、あまりにも過密な都市というのは非常にリスクが高いし、よく考えてみると、なんでこんな、例えばぎゅうぎゅうの通勤をして、1時間とか1時間半とか時間を使わなきゃいけないの、無駄じゃないかと、よく考えたら、なんかもっと違うやり方があるんじゃないか、そっちの方が幸せなんじゃないかということが見直されています。

それが、したがって分散ということが重要になってくるわけですが、ただ一方で、やはり集積だとか、そういうものもないとできないよねと、これはいろいろな活力度とか生む集積、そういったものも重要。

広島は、この分散と集積というのがうまくバランスしてあるところじゃないですかと、つまり過密じゃないということがあるのと、それから中山間地域、非常に豊かな中山間地域もあって、そういう分散に適したところもあると。

かといって一定の集積もあるということで、これをよく見直して、強みとして取り上げていくことによって、これから求められる適散・適集社会というところのフロントランナーになれるんじゃないかということです。これ、また後で御説明します。

それから施策を貫く3つの視点として、「デジタルトランスフォーメーションの推進」、それから「ひろしまブランド」の強化、「生涯にわたる人材育成」というのを掲げています。

少し一つ一つ見ていきますと、安心の土台と誇りの高まりというところなんです、今、いろいろな不安がありますね。

コロナはもちろんですけども、健康の問題とか、あるいは年金の問題とか、医療どうなるんだろうとか、いろいろな不安要素があります。

こういったことを持ち続けたままだと、やはり元気が出にくいというところがありますので、こういった不安を少しでも軽減していくと、そして安心につなげていくということが、やはり一番大きな土台として必要なんじゃないか。

そのために、いろいろなイノベーション、従来のやり方を変えていきたいと思いますとか、あるいはセーフティーネット、しっかりと、もし何か困ったことがあっても支えるような仕組みがある、そういったことをつくっていきましょうと考えています。

これが、まず「安心」ですね。

それから「誇り」の高まりという部分については、広島県は様々、いろいろな強みを持っています。

一つは自然環境というところで、瀬戸内海から中国山地まで非常に幅広い豊かな自然を持っています。

廿日市は、その代表というか典型というか、海水浴場からスキー場までってよく言われるあれですけども、本当に素晴らしい自然がある。

その自然がもたらす恵みである豊かな食、これもある。

こういったことが大きな強みです、それから豊かな産業もありますね。

広島県は西日本で1番の製造業出荷額、ずっと長らく1番だった、最近ちょっと福岡と競っていたりしますけれども、そういった状況、それから先ほど申し上げたような自然と都市が近いということも強みだということですね。

こういった強みを、しっかりと磨いていくことによって、県民の皆さんは誇りを感じていただく、それが大きな原動力になって、新たな挑戦ということにも向かっていけるんじゃないかということですね。

ということで、安心と誇りを土台にして、県民の皆さんお一人お一人が描く、それぞれの夢であるとか希望を諦めることなく前に進んでいくということが出来る、それをしっかりと後ろから支えていくというのが、このビジョンの考え方になっています。

それから、欲張りの中の「里もまちも。」といったところですね。

まず一つは、やはり魅力ある都市、広島市あるいは福山市といったところは、中国地方の中でも中核になる都市でありますので、そういったところで集積が必要なサービスあるいは、いろいろな、それこそエネルギーを生んでいこうということ、それから自然が豊か、そして心も含めて潤いをもたらしてくれるような中山間地域、よく過疎とも言われますけれども、過疎というよりは、やはり非常に自然が豊かな、条件が豊かなところじゃないかということですね。

それをしっかりと社会が継続できるような、コミュニティーが継続できるような、そういった地域の形成を図る。

それから廿日市のように都市と中山間地域をつなぐような、利便性が高く集約された都市、こういったものをつくっていこうと考えています。

したがって、まちだけがいいとか里だけがいいということではなくて、「里もまちも。」ということで欲張りだということ、ここでも言っています。

適散・適集については、先ほども少し触れましたけれども、コロナで3密というのが非常に問題を多く抱えているということが分かったわけですね。リスクも高い。

東京一極集中だとか、そういったようなこと、あるいはデジタルが遅れているねというようなことが、コロナで浮き彫りになってきたわけですけども、そういったことはよく、つぶさに見ていくと、これは大きく変えられるんじゃないかと。

コロナを契機として、過度に密集していたりとか、密接だとか密閉って、いわゆる3密、こういったものを避けて分散をしていくということが非常に重要だと、みんな気づいたわけですね。

開放的で快適な環境が、もっと人間らしいんじゃないかと。

デジタル技術を使ったら、これまでの密じゃないといけないと思っていたことを、時間とか空間の制約を乗り越えて実現できることがたくさんあるんじゃないかと、一方でイノベーションを生んだり活気を生んでいく、エネルギーを生んでいく集積であるとか集合も必要だということで、過度な分散、過疎であるとか、過度な集中、過密ではなくて、適切な分散と適切な集中、これがこれからの時代に世界で求められることじゃない

いか、もちろん日本全体でも求められることだし。

それを実は広島は非常に近いところにあるんじゃないかということで、つぶさに、まきに見ると、こんな状況で、田舎と、それからまちが近い、非常に豊かな自然がある、一定の都市機能も集積しているということで、そこを磨いていこうということでありませぬ。

それから次に、全ての施策を貫く3つの視点というのがあったかと思いますが、これはデジタルトランスフォーメーションの推進、それから「ひろしまブランド」の強化、人材育成ですけれども、デジタルトランスフォーメーションの推進というのは、これはデジタルというのは、いやが応でもやってくるわけですね、我々が拒否をしてもやってくると。

であれば、これをうまく活用して、むしろ波の先端を切り開いていった方がいいんじゃないかということですね。

大きなチャンスを生む可能性があるということ。

それから誇りというところにも関わってきますけれども「ひろしまブランド」の強化、広島の強みがいろいろありますから、それをしっかりと強化していくことによって、広島県民は自らのことを誇りに思うし、県外の人も広島っていいところだね、こんな素晴らしいものがあるねということを感じてもらうことによって、観光はもちろんですけれども移住だとか、あるいは必要な知の集積とか、そういうものを集めてくるのに役立っていくと思っています。

それから全ての原動力になっていく人材、この人材というのも、今や学校で勉強したら、もうそれで終わりという時代じゃなくなっていますから、生涯を通じて人が持つ能力と可能性を最大限に高めていく、それによって今、申し上げたようなことを実現していこうと考えているところです。

具体的には、ここにあるような17の領域によって、それぞれ取り組みを進めていくということですが、それぞれ目標値などを定めています。

例えば子供・子育てというところを見ますと、目指す姿、これはそのうちの一つですけれども、例えば「全ての家庭を妊娠期から子育て期まで切れ目なく見守り、支援するネウボラの拠点が全市町に設置されている」など、そういった姿、これは10年後、具体的にになっていたいということが描けるわけですね、30年後は、さらにもうちょっと抽象的になっていますけれども。

そこにいくための指標であるとか取組の方向というのを定めて、例えば指標であれば、安心して妊娠・出産・子育てができると思う人の割合、現状8割あるんで結構高いんですけど、これを9割以上にしていこうとか、あるいは、それを実現する上での様々な参考となるような指標を定めて、KPIとって定めていって、保育所の待機児童数だとか、あるいはネウボラを実施している市や町の数だとか、取組の方向としては切れ目ない支援を行っていきましょうとか、子供の居場所を充実していきましょう、こういった取組の方向性で施策を展開していきますということになっています。

こういったものが、ほかの分野それぞれたくさんありまして、教育なんかでも、今、進めています「学びの変革」という、こういったものをしっかりと進めていきましょうとか、観光であれば目指す姿として「ひろしまブランド」や「瀬戸内ブランド」というのが認知されていて、目標値として観光消費額、これは令和元年度では4,400億円ぐらいだったのが、令和12年度には、10年後には8,000億円ぐらいまで拡大をしていきましょう、お客さまの満足度も7割ぐらいだったのを9割ぐらいに持っていきましょう、そういったような目標を立てているわけです。

こういうビジョンになっているわけですが、最後、ここに書いてあるように、県内のどこに住んでいても、この欲張りな、あるいは「里もまちも。」というところ、県民の皆様お一人お一人が、夢や希望に挑戦できる広島県づくりを推進しましょうという風にまとめられているんですが、これは何を意味するかというと、ビジョンを実行するというか、ビジョンの姿を実現するのは決して行政ではなくて県民の皆様だということですね。

つまり県というのは県民の皆様一人一人個人、あるいは事業者さん、これは会社もあれば、例えばNPOだとかもあるし、福祉の関係の皆さん、医療の関係の皆さんもある。そういった皆さんが、形作るっているのが広島県なんですね、本当のところは。

ですから行政は、そういった皆さんが活動するということを後押ししていく。

挑戦を後押しというのは、そういうことでありまして、行政だけが何かをやっても、例えば広島県、11兆円GDPがあるわけですけれども、県内総生産が、行政が何かやった

からといって行政が生産するわけじゃないんで、これはメーカーさんとか、あるいはサービス業をやっている方が活動して、こういった県内総生産というのがあるわけですから、それをやはり後押しをするというのが行政の役割だと。

そういう意味で、このビジョンにあることを実現するのは、皆様一人一人であるということでありまして、それを我々は推進していくということで、そういう意味で一人一人が挑戦する、その結果、そういった広島県になっていくということで、これはみんなで一緒にやりましょうということでございます。

これが「ひろしまビジョン」でありますけれども、続いて意見交換に入らせていただきたいと思いますが、既に参加の皆様には御説明させていただいていると思いますが、最初にお一人ずつ5分ぐらいで御意見、あるいは御提案をご発言お願いしたいと思います。

皆様のご発言、一巡したら、残りの時間で、全員で意見交換をさせていただきたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。

発言の順番も既にお願ひしていると思っておりますが、御指名させていただきます。

お座りになったままでお話しいただければと思いますのでよろしく申し上げます。

それでは1番手、市里さんにお願ひいたしたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。

参加者①

市 里： 皆さん、こんばんは。

10年後の湯崎知事のお話を聞いて非常に明るいという感想を持ちましたが、やはり現実とのギャップをどこまで近づけるかというところが課題ではないかと思っております。

現在、私は串戸地区の自治協議会、16町内会があるんですが、その会長をしております。

少子高齢化、人口減少というのは、これは私たちの目の前に差し迫った問題であるかと思うんですが、この中で一番大事なのは、やはり少子化というところではないかと思っております。

ここに住んで子育てしてというような環境であれば、高齢化は、これは避けて通れないことですから、人口というのはそんなに減らなくて、横ばいぐらいで推移していくんじゃないかと思っています。

串戸地域でうれしいニュースがありました。

金剛寺小学校という小学校があるんですが、いつも35名ぐらいの1年生が入学してくるんですが、今年は45人という人数が入学してきました、2クラスに去年から、去年も2クラスだったんですが今年も2クラスになりました。

何でこんなに増えたのかと私も分からないんですが、廿日市が住みやすい、串戸が住みやすいということで来ていただいたんじゃないかと思っております。

串戸の自治協議会としては、自分たちのまちは自分たちでよくしていこう、住みやすく安心できるまちを目指そうということで、町内会のまちづくりをしております。

ただ、残念なニュースもありまして、16町内会ある中の2つの町内会が、去年は30代の方が町内会長をやられまして、そこまではよかったんですが、フルタイムで働いている30代の人をフォローする副会長がいなかった、副会長、もちろんおったんですが、フォローする人がいなかったという残念な結果に終わりました、協議会の方としては十分フォローしてきたつもりなんですが、選定のところでどこか無理があったんじゃないかと思っております。

それと女性の参加がまだまだ少ないんで、これからも女性の参加を大いに努めていきたいと思っております。

また串戸というのは、佐方と一緒に指定管理を受けているんですが、今年、職員に大学出の1年目の新人が入ってきました、若い人に向けては非常にこれが大きな力になるんじゃないかと思っております。

地域の課題としては、いつも役員のなり手が無いというようなことがあるわけですが、民生委員を例にとっても、地域の役員を例にとっても、県庁を辞めた、市役所を辞めたというような方が、行政の力というのは非常に大きいんで、そういうOBの方が地域の方に参画してくれると非常にありがたいなと思っております。

そういうところで範を示してもらおうと非常に、後に続く人も多いいんじゃないかと思っております。

それから、もう一つ、私は山登りが大好きなのですが、近郊の県北辺りの山に登りますと非常に山が荒れています。

スギやヒノキという針葉樹が多くて、これは非常に災害に弱いわけですが、やはり広葉樹という根の太い、下に根を張るといいますか、こういう木を大事にしないといけないんで、手入れのされた豊かな森、これが豊かな海を生み出すんじゃないかと思っております。

広葉樹の豊かな森は災害からも私たちの暮らしを守ることができますし、県の方としては開発には、やはりある程度の規制を設けて、山の上の方まで団地を造るといようなことは、できたらなくしてほしい、災害が起きた時にしまったということではなしに、その前に後処理に労力を使うのではなくて、未然に防ぐ、そういう方に力を注いでもらいたいと思います。

河川の浚渫にしても、災害が起きた後に、それじゃ、浚渫して深くしようというんじゃないしに、その前に手だてをして未然に災害を防ぐということが、非常に大事ではないかと思えます。以上でございます。

湯崎知事： ありがとうございます。

この地域社会、ますます担い手が大変なところで、みんなの力で、これをしっかりと維持していこう、それから森をつくるということが、災害の観点からも非常に大事だというお話をいただきました。ありがとうございます。

それでは続きまして光井さん、お願いできますでしょうか。

参加者②

光井： 皆さん、こんばんは。光井と申します。

ちょっと緊張していて、しっかりしゃべれないかもしれないんですけど、私からは先ほど湯崎知事からお話がありました「ひろしまビジョン」の中の、17の施策領域による取り組みの中で言いますと、子供・子育てというところと、働き方改革、多様な主体の活躍というところに当てはまるんじゃないかというところについて、お話をさせていただきたいと思えます。

まず私のことを少しお話しますと、私は広島県外出身でして、広島市内で大学出でから働いていたんですけども、第1子を妊娠したときに勤めていた企業で、それからずっと長く勤めたいという気持ちはあったんですけども、夫の仕事の都合で転居することになって、出産後に離職することになりました。

その後、広島市に住んでいたところから呉市に移って3年ぐらいいたんですけども、やはり第1子で子育てのイロハが分からないところで、知り合いが誰もいないところで子育てをするという経験をさせてもらったときに、やはり育児の不安があったりとか、やはり会社勤めをしていたときに、その自分がいた居場所が、やはり職場だったものですから、居場所がないような気持ちになって、やはり地域から孤立しているような感覚に陥ったというところもありまして、結構つらい思いをしました。

やはり私は、いろいろなニュースを見ていて、私の人格だったら虐待しないだろうとか安易に思っていたんですけども、やはり初めて子供ができて大人と話したい、でも夫も仕事から帰ってくるのが遅かったりとか、私の実家がやはり県外で、両親にはあまり相談とかもできる環境ではなかったのも、やはりうまくいかない育児のイライラとか不安というのを話す相手が、日常的にいないという日常を過ごしていて、やはり誰でも虐待してしまいそうになる感覚というのは私自身も経験して、ちょっと怖かったんです。

今は赤ちゃんを育てている時期は過ぎて、2人の子供が今、幼稚園に通っているおかげで、幼稚園を介して母親同士のネットワークというのがつくられていっているんですけども、今、やはり第3子を、このたび妊娠して思うのは、子供を産めば産むほど社会復帰が遠のいていく不安というのは、すごく感じています。

やっとな幼稚園に2人を預けて、これから自分の思うように働いたりとか、いろいろチャレンジしたいなという気持ちがあったんですけども、3人目を身ごもって、やはり子供は欲しかったんでうれしいなという思いと同時に、また最初から振り出しかという風に思って、本当にこれから正社員の復帰とかを目指すのであれば、いろいろな人に40歳以降は正社員として採らないよとかいって言われたとか、やはり高学歴な女性ほど採りづらいとか、いろいろなことをハローワークのところにも言われたりとかあったので、なかなか子供を産んで育てながら働くということって、いろいろなところに障壁というか、そういうのがあるんだらうなということに気づかされました。

母親の孤独を埋められるのって、やはり行政の相談窓口じゃないと思っているんです。

母親自身が日常生活の中で、他者と深い関係性を築くことができる選択肢とか居場所が、たくさん、その人自身が持つことが、やはり重要なんじゃないかと思っているんで、今は当たり前前の働き方として保育園に預けないと再就業できないみたいなことが、当たり前前になっていると思うんですけど、反対に地域の御高齢の方とか、活躍されている方からお話を聞くと、地域の担い手がいない、担い手不足だという話はすごく聞くんですけど、いや、お母さんたちを生かしてくださいというのは、ものすごく思いました。

やはり地域の中で、私、有償ボランティアで廿日市市の子育て応援室のママフレンドの活動というの、今2年目に入って、出産したばかりのお母さんとお話する機会とかはあったりするんですけど、やはりママフレンドの活動も結構御高齢の方が家庭を訪問されているという状況で、このたび私の幼稚園の仲良しのお母さんに、人手がないから一緒にやらないかということをお誘いして、入ってもらっていたりするんですけど、もっと幼稚園にいて、ちょっとの時間、2～3時間だけでも働きたいと思っている人はたくさんいるのに、なかなか人手が欲しいと思っている人たちからは、そこに目がいていないような感じがしていますので、何かそういった、子育て世代が活躍できるようなスキームみたいなものを行政の方につくっていただいて、2～3時間でも企業から業務委託してもらったりとかできるようなスキームの中で、柔軟に働くことができるのであれば、高齢になって定年退職した後に、体力的にもフルタイムで働けないような方であったり、障害者だと自分では思いたくないグレーな方とかでも、ちょっとした仕事にチャレンジしたりとかということが、柔軟にできるようになればいいなと、そんな未来が10年後に来たらいいなと私は思います。以上です。

湯崎知事： ありがとうございます。

お子さまが生まれて、とても孤独感にさいなまれるところから、それを支える仕組み、それから、そういった子育て中でも、短い時間でも働けるというような、そういった仕組み、そういうことが必要なんじゃないかというお話をいただいたかと思えます。ありがとうございます。

それでは引き続いて大島さん、お願いできますでしょうか。

参加者③

大 島： よろしくお願ひします。大島です。

私の方は廿日市の方で役職として教育委員というものもやっています。

地元では商工会、大野町商工会というところで理事をやらせていただいて、仕事では広告の企画制作ということで、主にカキのPRなんかに取り組んでいます。

この3つの点で御意見させていただこうと思ひます。

まず教育に関してなんですが、今回コロナ禍において非常に現場も大変だった中、まだオンラインの活用というので、現場の先生も含めて、みんながすごく積極的になっていました。

環境のおかげでデジタル推進というのが強制的に現場でもあって、すごくある意味でいい時期だったかと思ひます。

今、タブレットとか、現場ですごく道具はそろっているんですが、コンテンツの推進とか、後はそれを教える講師だとか、そういったところがまだまだ不足しているなと思うので、広島県とか廿日市もそうなんですが、そういったコンテンツのほうに力を入れていただけたらいいなと思ひます。

特にそういった中で、過去の慣例にとらわれない教育というのに取り組んでいけたらいいなと感じています。

産業に関してなんですが、我々の廿日市の方で先ほど海から山までとあったんですが、いろいろな地域で今、後継者不足というのが、やはり叫ばれています。

人口の少子高齢化というものもあるんですが、親から子に事業を承継しないとか、そもそもこの地域で事業を起こそうとしないとか、そういった状況かと思ひています。

私は親が商売やっいてなくて10年前に自分で起業はしたんですが、当時もあまり起業している人間というのがなくて、今もそんなに変わっていないかと思ひています。

そういったことで、どんどん地域のにぎわいというのが減少しているのを肌で感じていまして、それをなんとかかしたいなというところもあります。

広島県の10年後のビジョンの中でデジタル推進というところがあるんで、そういったところで廿日市もどんどん上がっていったらいいなと思ひています。

具体的には廿日市の持つ豊かな自然とか、都市へのアクセスのよさというのを生かして、佐伯・吉和という中山間で、自然環境の中でデジタル環境を整えてもらって、その中でスマートオフィスが推進できたり、島とかは宮島って一大観光地なので、そういった中でデジタル推進というのをやることで、新たな観光コンテンツをつくるとか、ただただ情報を発信するのではなくて、今ちょうど人がいないんで、そういったところで、また物流とか生活の移動の新しいモビリティイノベーションとか、そういったことがどんどん進めていただけたらいいなと感じています。

そういったことで地域がまたにぎわって、この廿日市で起業したりとか、そういったことが生まれたらいいなと感じています。

後は最後、広告というか、水産業のところの広島県の目指すビジョンというのに共感しています。

廿日市も広島県の中でカキの一大生産地と感じている部分もあって、そういったところのカキを輸出するというところが、すごく共感しています。

カキも、やはり非常に廿日市でいうと江戸時代から続くカキ屋さんもいて、そのカキ屋さんが広島のカキを大阪とか京都に持っていったことで、広島のカキが日本に広がっていったということもあるので、今の時代だったら日本だけではなくて広島のカキを世界に発信していくというような、熱い思いを持ったカキ屋さんと一緒に動けたらいいなと思っています。

そういったことで広島のカキが世界に広がっていけば、子供にとっては地域の資源というのが世界に誇る産業になったり、そういった世界に誇る産業であれば若手の後継者も、わしもやってみようとか、かっこいい水産業になっていけたらいいなと感じています。

私も以前、実際に今、島田水産というカキ屋さんのPRをしているんですけど、世界中から結構お客さんが来てくれていて、広島廿日市にカキを食べたくて旅しに来たという方も結構いらっしゃって、だったら現地はどうなんだろうと思って、実際一番多かったシンガポールに行ったことがあって、現地の人に聞いてみたら、広島のカキとか、我々は日本のカキを食べているという風に言われていて、僕らが思っている広島のカキというよりは、世界からするとあくまで日本のカキというところなんで、広島ブランドとしてカキが世界に発信できたらいいなと感じております。以上です。

湯崎知事： ありがとうございます。

この教育、それから産業、そしてさらには農林水産業においてもデジタルというのが大きな鍵だということで、いわばイノベーション、それぞれ起こしていく必要があるんじゃないかというようなお話であったかと思います。

それから誇りの話もしていただきました。ありがとうございます。

それでは続きまして安村さん、お願いできますでしょうか。

参加者④

安村： よろしく申し上げます。安村通芳と申します。

私自身は廿日市市の出身ではあるんですが、高校卒業後にアパレルブランドに勤めだしまして、その後、全国を転勤で回り、最終的には東京で勤務しておりました。

その後ファッション業界、いろいろ社会課題となる課題を抱えておまして、児童労働の問題とか、いろいろ抱えているのを目の当たりにしたところで、もう少し自分のライフスタイルを見直したいなという思いから、故郷である広島に帰ってき、その後、起業して現在に至ります。

起業してからはソーシャルイノベーションをテーマに活動しておまして、自分が当たり前前に生活していく中で、社会課題に感じる部分を解決できたらいいなと思って、日々活動しております。

本日、僕から質問させていただきたかったのは、まずデジタルトランスフォーメーションの推進についてです。

現在DXの推進について、非常に重要なことだと考えていますが、この施策を推進するためには技術の開発や導入も必要ですが、県民一人一人が、これらの新しい技術を使いこなすことができるように、ITリテラシーをより高めていく必要があるかと思っています。

この点、先ほどの大島さんと同じ考えではないかと思っています。

僕自身、廿日市市において、コロナ禍で影響を受けて孤立してしまいがちな高齢者に向けて、非常事態宣言下においてもZoomなどを活用し、健康相談や生活相談を行うこと

ができないかということ、昨年の5月から取り組んでおります。

その中で課題となっているのは、実施できる技術自体はあっても高齢者などを中心に、若い世代の方でも、その使い方が分からない方が大変大勢いらっしまったという点です。

この解決のために私たちは、まずスマホの使い方を知ってもらうところが重要だと考えて、高齢者向けのスマホ教室を中山間地域で開催したりですか、職員向けのZoom研修会などを実施させていただいております。

このようなりテラシーを向上させるための手段として、湯崎知事ご自身はどのようにお考えかという点を、後ほどお聞かせいただければなと思います。

次のテーマは中山間地域についてです。

これからの中山間地域にとって、多様な人材のネットワークの構築は必須の事項だと考えています。

私自身も県が行う人材プラットフォーム、ひろしま里山・チーム500に参加させていただいてはいますが、ここ数年間、当初、この取り組みがスタートのときに比べて、ややネットワークの構築のスピードや、コミュニケーションの手法が陳腐化しているのではと感じています。

このままでは10年後の目標値の達成は非常に困難なように思われます。

その中で今回コロナウイルスの流行による社会の停滞をきっかけに、ICTを活用し、民間の中に様々なコミュニティーが生まれています。

これはデジタルの中のコミュニティーですね。

このコミュニティーが生まれている中で、その中でも特に、ひろしまジン大学さんという団体があるんですが、この団体が行っているSNSを活用したジン大サークルというものは、発足からわずか3カ月足らずで県内の大学教授や民間企業の経営者、また実際に地域で活躍するプレーヤーなど、広島県で活躍する様々なジャンルの若者から幅広い世代の方が約219名以上、人材が集約されています。

この219名以上の点なんですが、ちょっとこの文章をつくらせていただいたのがだいぶ前なので、今ではもっと多くの人数が集まっていると思うんですが、こういったコロナを経験することによって得られた新しいプラス面、こういったプラス面の財産を県として、しっかり把握していただき、官民が協働することで中山間地域の目指す姿を、より良く、より早く実現できれば素晴らしいと考えております。

ちょっと早口になってしまいましたが以上です。

湯崎知事： ありがとうございます。

やはりデジタルトランスフォーメーションの重要性ということと、それから特に中山間について、やはり大きな課題ですので、特に人材面に注目して御発表いただきましてありがとうございます。

それでは最後お待たせいたしました。早川さん、お願いできますでしょうか。

参加者⑤

早川： 早川幸江と申します。

私は7年前に廿日市の地域支援員という、地域おこし協力隊の枠を使っただけで採用されて移住してきました。

千葉県の浦安市から引っ越ししてきました。

私は浦安市の方で市民活動センターというところのスタッフで勤務していたんですけども、ちょうどその頃、委託を受けたNPOが運営することになった過渡期だったんですが、みるみる相談件数が上がって行って、様々な団体がどんどんできていった時期だったんですね。

私もそういうものを見てきたので、廿日市もこれからそんな風になるんじゃないかと楽しみに見ていたんですけども、実際には少し遠ざかっているように感じるものが多く思っています。

やはり意欲を持って活動している人が複数の役を持たなくては回らない状態だったりとか、まるで関心のない人たちが周りから見ている批判をするとか、そういった状態があるなと感じています。

10年後、大人の10年後というのは、大人が10年先を見ているのと、子供が10年先を見るのって、ものすごくスピード感とかも違うなと思っておりまして、なんか人材を本当に育成していかないと回らなくなるぞという思いを、すごく感じたところで、やはり子供を、10年後にすごく役に立つ子供たちを育成したいという思いがあって、子供がつくる

まちという活動を少しずつやりたいという思いから、コツコツと積み上げてきています。子供がつくるまちというのはご存じでしょうか、皆さん。

ドイツのミュンヘンを発祥にしているんですけども、子供がまちをつくって、その中で起業したりアルバイトをしたり、職業体験をその中で積んだりとか、あと、まちのルールをみんなで作っていったりとか、後はそのまちの町長または市長なんかを選ぶための選挙に参加したりとか、大人の世界であることの疑似体験をするというものです。

また通貨を自由に使ったりするところでは、遊びながら、いろいろお金のことなんかも学べるようなイベントです。

ざっくり言ってしまうえば大きなごっこ遊びのようなものなんですけれども、そういったことを体験するということをやっていたらいいなと思っています。

なんと言っても体験ってものすごく大切で、知っているのとやっているとは違って、そこはすごく大きなことだなと感じています。

ごっこ遊びって私ずっと11年間ほど保育士をしていたんですけども、やはりごっこ遊びのもたらす効果というのはすごく大切で、1番に憧れのものになること、夢を実現する力を養うことにつながっていきます。

それと、それらしく振る舞うこと、それが自分ではないほかのものになって、相手の立場になって、その相手の立場の気持ちを知るとか、そういったことを学ぶ機会にもなります。

心理学でも最近をよく使われている手法ではないかと思います。

そんなことを、ちょっとやりながら、市民力を高めていく一助になったらいいなと思っています。

また、もう一つ思っていることが、そういった市民活動とかを、しっかり伴走して支援する中間支援組織の充実が本当に大切だなと感じています。

人づくりをする上で、やはりいろいろなモデルを見ることというのは、すごく大切だなと思っています。

例えば私なんかができることをやっているけれども、そういったモデルを見て、早川さんでもできるんだとか、隣の誰々さんもこんなことをやっているんだとか、そういったことを見るということで、どんどんそういう、やりたいって思いを持った人がチャレンジすることができる、まちづくりをしていけたらいいなと強く思っております。ありがとうございます。

湯崎知事： ありがとうございます。人材育成ですね。

今、具体的に、子供がつくるまちというご紹介をいただきました。ありがとうございます。

ひととおり、今、皆様からお話をいただきました。

やはり今回、デジタルの活用という部分と、それから、まちづくりですね、それから、そこに関わるまた人づくりということ、多くの皆さんが触れていただいたんではないかと思えますけれども、市里さんも特に、まさに町内会といった地域の活動のベースになっているようなところ、これがなかなか担い手がいないというところで、ここでの人づくりですよ。

行政の人間は経験があるからびったりなんじゃないかというようなお話も含めて、そういったところの人づくり、ですから生涯にわたって人づくりが大事だというのは、まさにそうだと思うんですね。

いろいろな場面というか、ステージにおいて、役割、違うものが求められるようなこともありますし、今、その時代、今の時代では仕事自体も変わっていくとことがあるので、生涯学び続ける力を持って、そして、その役割を果たしていくということが必要じゃないかと我々思いますけれども、そういったことが実は教育大綱なんかにも書いたあるところなんです、いずれにしても地域をつくる、それは人であり、その人づくりをしっかりとやっていく必要があるということですね。

それとやはりつながっていると思うんですけども、光井さんが子供・子育てとか働き方というところのお話をいただきましたけれども、本当に今の、生涯にわたっていろいろな役割があるというところと、やはり関わると思うんですが、それぞれの生涯のステージで、例えば働ける時間が変わったり、フルタイムで働けるときがあったりとか、あるいは子育て、あるいは介護で少し短い時間で働ける、そういうときに100%じゃないから駄目だよということじゃなくて、やはり受け入れて、しっかりと役割を果たしていただくことが、その人の人生を豊かにするし社会にも貢献していただけるということ

で、そういったことを受け入れる社会をつくるということが大事だと思いますよね。

これは、まさに我々、今このビジョンの中でも働き方改革という風に言っていますけれども、多様な働き方、いろいろな事情がある、あるいは夢を持っているとか、そういったことで、いろいろな働き方をしたいという方がある、また個々の個性もある。

それをしっかりと受け入れて、みんなが力を発揮できるような働き方が実現できる、そういう社会にしていこうという風に我々も目指して、このビジョンの中でうたっております。

子育て、もちろん非常に重要で、そこを支えていくということは、先ほどの子育てのところでも御紹介しましたが、今、我々、ネウボラというのに取り組んでいます。ネウボラの我々が目指すイメージというのは、まさに光井さんがおっしゃっていただいたような、社会に、なんていうんでしょうかね、包摂されていて安心感があるという、なんか孤独だとか、あるいは誰かとすぐつながっているということともちよっと違って、何かあったときにしっかりと周りの人が支えてくれているという、そういう安心感ですね。

それはネウボラというのを通じて実現していきたいという風に、今は目指しているところです。

大島さんはデジタルの話をしていただきましたけれども、これは本当にあらゆる場面、大島さんも教育と、それから産業、農林水産業というところでお話をいただきました。

このデジタルを使えば、冒頭にも時間と空間を超えることができるってお話をしましたけれども、新しい価値を生んでいくということはもちろんですけれども、海外の市場にも打って出て行くにあたって、デジタルということは非常に大きく役に立つだろうと思いますし、また、それを進める上での人材育成、やはり大事ですよ。

デジタルリテラシーというのは非常に重要でありまして、それについては安村さんが、リテラシー向上のための手段というのを指摘していただいております。また中山間を含めた人材育成の話も触れていただいておりますけれども、デジタルの人材育成という観点から、まさに教育現場でまず先生がしっかりとデジタルリテラシーを獲得してもらって、子供たちは割とすぐに慣れちゃうものですから、先生がまず慣れないといけなくて、そのときにまた今、教育委員会の方で教育長がよく言っているのは、先生が先生じゃなくてもいいじゃないですかと、とてもたけた子供たちがいるので、そういった子供たちが先生を助ける先生アシスタントとして、友達を教えるもいいじゃないか、みたいな、そんなことも言っております。そういうところから始まって、そうはいっても既にもう学校は卒業された高齢の方なんかも含めて、そのデジタルリテラシーを高めていくということは大事なわけですけれども、それはもちろん例えばスマホの使い方とかパソコンの使い方とか、あるいはSNSの使い方とか、そういったことを具体的に教えていくというのは、リテラシーを高めていくというの、これ実は市や町が結構やっていた中で、我々はそれを後押しをしていきたいなと思っておりますし、究極はデジタルをあまり意識しなくても使えるという状態というか、そういう技術とかサービスをつかっていくということ、目指していきたいという風に取り組んでいるところです。

そして早川さんも、子供がつくるまちという切り口で人づくりの、人材育成のことをご指摘いただきましたけれども、根本は、やはりまちづくりというのがあって、その中で、それを担う人というのがいて、それを子供のときからしっかりと、リアルな文脈というか、沿って理解してもらえるように、子供がつくるまちというのはどうですかってお話だった、本当にそのとおりだと思いますね。

遊びがもたらす効果ということをおっしゃっていただきましたけれども、これも実は広島県の取り組みの中で「遊び学び育つひろしまっ子！」推進プランというのがありまして、これはご存じですか。

これは言ってみれば広島県の乳幼児教育の学習指導要領みたいなことで、まさにおっしゃっていただいたような、いわゆる非認知能力というんですけれど、非認知能力、つまり計算ができるとか漢字を知っているとかではなくて、やはり友達と協働できる力だとか、あるいは我慢強く物事に取り組む力だとか、そういったことは本当に小さいときに培われる力なので、もう産まれたとき、あるいは産まれる前から、これはネウボラなんかを通じてきちっと行き渡るようにしようというのが、我々の考え方なんですけれども、そういった取り組みも今、我々は頑張りたいなと思っております。

本当に皆様の問題意識、この県の問題意識とやはり共通するところがあるというか、同じページにいるなという感じがいたしますので、とても心強く思ったところであります。

すし、また一緒に、それぞれいろいろな課題感じていらっしゃると思いますけれども、取り組みを進めていけたらと思います。

松本市長、これまでのお話の中で何かお気づきの点とかございますか。

松本市長：今日は皆さん、本当にありがとうございます。

少し感想をお話しさせていただきたいと思います。

まず知事からは「ひろしまビジョン」のお話を伺いました。

そのビジョンの中でポイント3つ挙げていらっしゃいます。

このビジョンを見て非常に共感をしています。

先ほど知事からもご紹介ありましたように、廿日市は海から山までというお話がありました。

廿日市は非常に多様性のあるまちだと思っております、まさに広島県の縮図と言ってもいいんじゃないかと思っています。

その中で私、廿日市というまちは、今、人々の生活がたくさん多様化してきて、そういった多様化している人たちのニーズに応えることのできるまちだと思っている。

この廿日市の中心部というのは、以前と比べてかなり都市化が進んできております。

少し西に行けば大野という、今は非常に若い人たちの移住が進んでいるところで、廿日市の転入超過、5年連続、今、転入超過なんです、5年連続の転入超過を支えている場所が大野というところ。

少し北に足を延ばせば、ちょうど中間地域、佐伯地域、本当に緑があって水がきれいなところなんです。

さらに北に行くと、まさに中国山地を背中にした吉和がある。

そして島、まさに宮島、世界遺産の宮島があるわけですがけれども、いろいろなライフスタイルにお応えできるまちだと思っています。

先ほど適散・適集と、非常にこれ、上手に表現されているなど思ったんですが、まさに廿日市は元々、広島市のベッドタウンとして成長してきたところですがけれども、やはりこれからしっかりと、自立した一つの自治体として単独で頑張っていくには、やはりホームタウンの要素が必要だろうということで、少しずつ廿日市の中心部というのは適集と、もう少し密度を上げていって、適集と言われるぐらいのところまで、密度を上げていく必要があるんだろうなという気がいたしております。

その中で今日は皆さんからいろいろな話を聞かせていただきましたけれども、実は市長になったときに、これからいろいろなことをやっていくイメージとして、大体8割ぐらいは既存の事業を維持する、もしくはそれを充実させていく、質を上げていくということが8割ぐらいかと。

後の2割は未来に向けての投資であったり、後はこれまでなかった市民のニーズって、とにかく変わっていますので、そういった、新しいニーズに応えていくのが2割かという思いでスタートしましたがけれども、やはり今日も皆さんの話を聞いて、まずは市里さんからは地域共生のお話でした。

これは福祉の延長線と考えるの、やはり少し間違いなのかと、あるいは福祉の部署だけでは、単独では当然片付けられるような問題ではありませんし、いろいろなところが連携していかなければいけないという意味においては、私はある意味、新しいことを始めていかなければならないんだろうと思っています。

そして女性、高齢者、障害者の新しい社会の活躍という御提案をいただきました。

2～3時間でも働く時間があれば働きたいんだというお話、行政がコーディネートしてくれたらいいのというお話でした。非常に面白いと思います。

ぜひ、これ行政自身の中へ入ってコーディネートするのがいいのか、もしくは商工会議所とか、そういったところがコーディネートするのがいいのか、ぜひこれは検討させていただきたいと思っております。

それとやはり、なんとんでもDXのお話が出ました。

DX、ITリテラシーというお話も出たんですが、よく中間地域のデマンドバスで結局、高齢者の皆さんがスマホが使えないことを理由に、結局そのデマンドバスを諦めたみたいなニュースも聞きましたけれど、やはりリテラシーというのは大事なんだろうなと。

ただ、市としても、いろいろな講習会、コミュニティーの中でもやっていただいているんですが、これ、本当に高齢者のためになっているのかという講習、あるんですね。

もしかしたら、そのキャリア自身の宣伝という、ちょっと語弊があるかもしれませ

んけれども、そういう人たちのための説明会になってやしないだろうかと、私たちもそういったところを反省しなきゃいけないんだろうなと思っています。

そして10年後に活躍してくれる子供の育成というお話をいただきました。

ぜひ子供市長が頑張っている姿、見てみたいと思いますので、ご案内いただいたらぜひ伺いたいと思いますし、実は廿日市としても、これは議会の御理解もいただかなきゃいけないんですが、湯崎知事もやっていらっしゃるじゃいます子供議会をやってみたいなと思っています。

ぜひそういったところにも子供さん出席していただいて、また自主性を発揮していただいたらなと思っています。

いずれにしても、これからの行政というの、私はキーワードは変化だと思っています、変わっていかなくちゃならない。

先日も職員の前で講話する機会がありまして、やはりこれから私たちは変化を恐れてはいけなと、とにかく変わっていかなくちゃならない、住民のニーズもどんどんすごいスピードで変わってきているので、その変化を恐れちゃ、逃げないようにしましょうというお話をしたところでした。

今日は本当に皆さんから新しいお話を聞いて、今まで2割でいいといいますか、2割ぐらいだろうなと思っていたところ、恐らく3割以上は、そういった新しいところに、エネルギーを注がなきゃいけないのかという気がしております。

非常にいいお話を聞かせていただきました。

湯崎知事： ありがとうございます。

それでは、ここからフリートキングになるんですけども、今、それぞれの皆さんの御発言を聞いて、こう思ったとか、こんな質問があるんだけどみたいなのがあったらお願いできればと思いますが、いかがですか。安村さん、お願いします。

安村： ありがとうございます。

皆さんのお話を聞いている中で、今日、僕がしゃべろうと思っていたことプラス、一つ共感できることがありまして、地域活動への参加の点なんですけれども、やはり共働き世帯への地域活動への参加の負担がすごく、時代とともに増えてきているなと感じています。

昨年、私、大野東小学校のPTA会長をやらせていただいていたんですが、やはりPTAもそうですし、地域の子供会などの活動もそうですし、子供1人につき何回役員をやらなければならないといったような、子供の数がそのまま負担につながるようなルールが散見されるんですね。

こういった地域の決まり事だったり、地域活動についての活動への取り組み方も、今後、新しい方向性で変えていければいいなと思ったのが、今日、皆さんの声、聞いて感じました。

なので、こういった多子の事例ですかね。

実際、今、廿日市市でも広島県が推進するイクボス同盟に共感いただいて、先日、市長にも宣言していただいたばかりではあるんですけど、やはりまだまだ広島県内だけではなく、ほかの県と取り組んでいる事例共有が足りないのではないかと感じていますので、ぜひ積極的に他県の事例、他市の事例、教えていただければありがたいなと思いました。

湯崎知事： ありがとうございます。

いろいろなコミュニティーにはいろいろなルールがあって、そういう学校でのPTAの活動なんかも、その一つかもしれません。

ある地域で私がお話をしたときに、こういう会、ちょっと違う会なんですけれども、やったときに、若いというか、若手の女性が地域の町内会みたいなのところに参加をしてお話をされたときに、話をしようとする、なんでおまえがここにおるんじゃという、高齢のその方に言われたと。

やはり、なんていうんですか、そこの序列みたいなのがあって、誰は発言していいけれど誰は駄目だみたいなの、そうなる、結構田舎のところだったんですけど、そんなことがあったんですよ、みたいなの。

やはり変わっていかなくちゃいけない部分というのはありますよね。

いろいろな、今みたいな話を聞くと、いや、廿日市はそんなことないんだと思うんですけど、笑い話のように聞こえるかもしれませんが、実際にやはりそういうことがあるということ、それはいろいろな地域の事例共有をすれば、また変わらなくやい

けないんだなという認識もあるかもしれないですよ。

市 里： 今のお話も含めて、いかがですか。地域の活動というの、市里さん、お願いします。

廿日市の場合は、まちづくりの拠点というのは公民館なんです、うちでは市民センターという風と呼んでおりますが。

やはり市民センターが核となって、皆さんを個々に集めて、集ってというようなことで勉強しているわけですが、先ほど生涯学習という言葉もありましたように、誰でも担い手になれるような、そういうまちづくり、町内会長が別に65歳以上でなくても若い人でもできるような、やはり体制というのを、もちろん女性でもそうなんです目指しているわけですよ。

先ほどの早川さんも、子供がつくるまちというの、うちの方に講師に来ていただいたんですが、ものすごく人気があるんですよ。

うちの小さな串戸という地域じゃなしに、ほかの地域からも参加がありまして、ぜひこれからも廿日市でやってもらいたいなど。

ただ、大人が中に入ることできないんですよ。

子供だけがやっていますので、話を聞くと、感動するんですよ。

そういうのをやはり、ほかのところでも、ぜひ早川さんに広めていただいて、地域づくりはもちろん高齢者もいいんですが、若い人でも担えるというような地域づくりを、これからも目指して、やっていけたらいいんじゃないかと思っております。以上です。

湯 崎 知 事： テーマの1つになっていると思うんですけど、地域共生社会というもの、先ほど市長もおっしゃっていただきましたが、やはり今、社会が、今というか、これまでずっと基本的に近代化というのは、地域の人々の絆をできるだけ断っていくというような動きになってきたわけですよ。

昔だったら、我々の子供の頃でもそうですけれども、我々というの、私は今年56歳になるんですけど、昭和世代なわけですけども、近所のおじちゃんおばちゃんに面倒見てもらったとか、なんか晩ご飯の時間になったら友達の家に行ったら「ご飯食べていきんさいや」って言われて、そのまま食べていくと。

今はちょっとなんかそういうこと、なかなかないじゃないですか。

もっと昔は、もう地域の子供らは、その辺で遊んでいて、誰かが、大人が見ているとか、あるいは冠婚葬祭も自宅でやったりとか、そういったことが本当に昔はありましたよね。

それがどんどん役割分担して、子供は保育園に預ける、生活に困ったら、お互いみそとかお米を融通するんじゃなくて生活保護で、そういう風に、すごく地域のつながりを切るようなかたちでやってきたんですよ、お互い干渉されたくない。

こういう社会の中で、今度はもう一回、その地域の絆をつくりなおしていくというのはとても大変なことで、お互いが、やはり多くの皆さんがそこに支え合うというところに参加をしていくということが重要で、そこは高齢の方もそうだし、子供たちも、子供たちが高齢の皆さんの元気のもとになっていくということも、立派な支え合いだと思いますけれども、そういう社会を目指していこうというのも、実はこのビジョンの中の大きな目指すところでもありますね。

本当に、そういう意味では多様性、そういう中で多様性を受け入れないと、若い女性が発言すると、若いということと女性だということで拒否されちゃうみたいなことで、それだったら今みたいな地域共生社会というの、生まれないという、新しい時代の地域共生社会を目指していこうというのが、一つ大きな方向だと思いますね。

ほかにはいかがでしょうか、どなたか。光井さん、お願いします。

光 井： 私自身も市民センターに行って、地域の高齢の方とか活躍されている方とかと、接点が欲しいなという思いはあるんですけど、やはり民生委員さんとか町内会長さんとか、もう活躍されている人たちが固定されている状況で、なかなか若いお母さんたちが、ちょっと入っていきたくないなというような隙がないように見えてしまって、なんか例えば町内会長さんの負担が結構あるような、いろいろなお仕事があると思うんですけど、そのボランティアでやっておられると思うんですけど、自治会に配布されるような予算で、ちょっとお母さんにお小遣い程度で経理やってもらうとか、なんかそういったお母さんたちの経験が積めるような、再就業するまでの時期に、生涯学習の一環でリカレント教育という風に言われていると思うんですけど、なんかそれが大学で学び直すとか、なんかそういうハローワークの研修に行くとかという知識を付けるだけで、多分留まっ

ていて、経験をするというところに、まだ介入できていないような気がしているんで、それをなんか地域の中で枠組みを作っていくとか、何か例えば広報とか、いろいろポスティングをしていく役割があるけれど、腰が痛くて最近歩けないからしんどいわ、みたいな方の代わりに、子供を連れてお散歩するついでにポスティングするということで、ちょっとお小遣い稼ぎができたらやってみたいな、みたいなのがいるかもしれないんで、なんかやはり働く、フルタイムで働く手前の枠組みみたいなのを、もうちょっと具体的に県で考えていただけたらいいなというのは思います。

湯崎知事：なるほどね。

特に経験とか体験とか実践というところが、教育の大きな部分を占めるという意味においては、いろいろなところに、そういうチャンスがあるんじゃないかということですね。

そういう地域での取り組みはもちろん、子育てそのものも大きな経験、体験じゃないかと思えますけれども、うまくそれを活用できるような仕組みが確かにあるといいですね。

その地域社会という中で、地域共生社会という中で、またいろいろと考えていけたらなと思えますが。

ちなみに、そういう経験、体験を大事にしようというのは職場でも本当に言えることで、これも何度も例に出して、うちの県庁の人事に大変申し訳ないんですけど、県庁なんかでも、多分、廿日市市なんかでも、そういう風な言われ方をすると思うんですけど、育休だとか取っていると、特にやはり女性が多いじゃないですか。

育休を4年とか5年取っているんで昇進が遅れますと、遅れていますと、経験が足りませんという風に、自動的にそういう風になっちゃっているわけなんですよ。

それはおかしいじゃないですかと。

だって育児とかで、やはりいろいろな経験をしていて、しっかりといろいろなことのマネジメントの力だとか、あるいは人の共感力だとか、それって課長とかなるには非常に重要なスキルだとか能力だったりするじゃないですかと。

だから自動的に育休何年だから、その分、遅れているという、そういう風な考えはおかしい、そういう実世界の、経験というのはいろいろなところで、でき得るということで、逆に地域の経験をすることによって自らを高めるということも、非常に重要なことかもしれないということですよ。ありがとうございます。

その他、いかがですか。松本市長、どうですか。ごめんなさい、大島さん。

大島：先ほどから結構まちづくりの話があったんで、その点で、もう1点だけ。

廿日市だと最近、共同でやるまちづくりというのを今年は取り組んで、私も参加させてもらったんですけど、さっきのいろいろな団体とかあるんですけど、お互いを知らないといけないなと思ってます、もっと。

なので、なんていうんですか、その団体に偏る、僕もいろいろな団体に属しているんですけど、属しているからこそ、やはりその枠にはまってしまう部分もあるので、その枠を取り払って、本当にみんなが話す場とか、そういうのが、それって多分、行政主導じゃないとできないなと思うし、後は昔からやっている地域の祭りというのが最たるものじゃないかと思っていて、その祭りの参加者も団体とか、なんだろう、地域とか関係なく一つのことに向かっていけるという活気が、今、特にコロナでできていないんで、そういったのが今後できていったらいいなと思っています。

今日は特にデジタル推進というので、どんどん話をしたんですけど、結局アナログな部分というの、すごくまちづくりとかというのは大事なので、例えば市民会議とか県民会議とか、よその人とか地域を知るという場が今後もどんどん増えていったら、いいまちになっていくんじゃないかと思っています。

私も元々、大野というところで生まれ育ったんですけど、その地域がすごく田舎で嫌で、大学時代、県外、関東の方に行ったんですけど、帰ってきて、すごくいいまちだなんてあらためて思うし、自分が子供の頃、川で遊んでいた写真というのが、昔、商工会の50周年というので見つけて、なんか自分と妹が川で魚をつかみ取りしているのを、実は地域の僕の先輩が、それを企画してやってくれていたとか、そういった本当に祭りとかで地域を知ることが、やはりいろいろないいいまちになっていくんじゃないかと思っています。以上です。

湯崎知事：ありがとうございます。

お互いを知るというの、やはりデジタルだけじゃ知りきれないし、そういう機会、ま

たいろいろな壁，そういうものがないよう，あるいはそれを取っ払って，知り合ってお話をしてという，そういうことですね。

適散・適集と同じような話で，デジタルとリアルも，やはりうまく組み合わせてやらないと，デジタルだけでは駄目だし，リアルだけだと今の新しい時代に追いついていけないということがある。

これをうまく組み合わせるといことが重要かとも思いますよね。

すみません，さっきちょっと振りかけてすみません。

松本市長： 地域での経験，共同のまちづくりというお話がありました。

まさにそのとおりで，当然これからいろいろ多様化する，市民ニーズが多様化する中で行政だけではまちづくりできませんで，市民の皆さんと一緒にしていかなければならない。

先日，職員の前での講話でもお話をしたんですけれども，地域の皆さんにお願いをする前に，まずは私たち自身がまちの中に出ていく必要があるんじゃないか，ちょっとそれが足りていないんじゃないかというお話をしました。

実際頑張っている，今日も職員来てくれていますけれども，頑張っている職員たくさんいるんですが，全体としてみると，やはりもう少し地域に出ていく量というのが足りていないのかと。

実は廿日市には採用して3年目の職員は地域に出ていくという制度をしております，今年も3年目の職員は市里さんのところの串戸で大変お世話になっています。

やはりそうやって地域の人たちが，いかに市役所に期待を持っているのかと，疑問を持っているのかと，そういったことを知れば，やはり職員としてもモチベーションも上がっていくので，どんどん皆さん出ていくべきだというお話をしていますから，まだまだ足りていないかもしれませんが，職員も一緒になってこれから出ていこうと思っています。

皆さんと一緒にまちづくりを進めていきたいと思っていますので，引き続きご指導いただけたらと思っています。

湯崎知事： ありがとうございます。

そろそろ時間も迫ってきたんですけれど，これをちょっと言い残したら，とてもじゃないけれど帰れません，みたいなものがあれば，どなたか。

早川さん，大丈夫ですか。

早川： 毎年この時期いつも思うんですけれど，市の職員の方たちの異動が，もういなくなってしまったのという，毎年この時期に，せっかく話を密にとれてきた，あの職員さんが，「えっ」というのが，いつもショックであることで，なんか早すぎるなというのをいつも感じています。

これだけは言っておきたいものでした。

なんか適材適所で，すごく活躍してくれる職員さんたちと一緒に市民がやっていくことになったことに対して，余裕を持った人事をしていただけると，すごくうれしいなと思っています。以上です。

湯崎知事： ありがとうございます。

行政の職員の方は2年とか3年で変わって，なんら違和感なく次の仕事をやっていると思うんですけれど，事業者の皆さんとか地域の皆さんとかというのは変わらないですから，もう10年，20年，皆さんやっつけらっしゃる中で，役所の人というのはどんどん替わるよなって，蓄積が，せっかくの蓄積が失われていくというのは本当にもったいないことですね。

ちなみに広島県では今，大体，異動率という，職員の全体に対して何人ぐらい異動しますというのは2割ぐらい，つまり20%異動に，それは何を意味するかというと，5年に1回ということですね，平均して。

そういう風に今ちょっと延ばしているところでありまして，人材育成の観点から，全く異動しないというのも困るんですけれど，5年に1回というのは30年に6回ですから，課長とか，そういうポストも含めて，ちょっと目指していきたいなと思っています。

時間がまいりました。

本当に今日もたくさんのいろいろな御意見をいただきまして，本当にありがとうございます。

本当に今，すごく変化をしている時代にあって，やはりまちづくりというのはすごく基本ですね。

今お話しいただいた皆さんの問題意識とか取り組みということについても、やはりそうやって皆さんお一人お一人が活動されることで出てくる疑問だとか、こうだとか、問題意識だとかということだと思うんですが、それこそがやはり私は広島県、廿日市市というまちをつくって、それから広島県をつくっているんだという風に、あらためて思うんですね。

こうやって今日来ていただいた皆さんというのは、いろいろなことを人ごとにせずに、自分ごととして取り組んでいただいているという方々ばかりだと思うんですけども、本当にそういう力で広島県が前に進んで、みんなで力を合わせて、このビジョンにあるような10年後、さらには30年後の広島県、みんながやはりここにいて良かったなど、まず安心の土台、まちづくりで安心の土台をつくって、そして誇りを高めて、そしていろいろな人がそこから挑戦をして、いろいろなことが実現できるという、そういう社会にしていきたいなと思います。

今日は本当にありがとうございました。これからもどうぞよろしくお願いします。本当にありがとうございました。

閉 会

司 会： 皆様、ありがとうございました。
これをもちまして「ひろしまの未来を語るin廿日市」を終了いたします。
本日は御協力いただきまして誠にありがとうございました。